花の志満臺 二編

花の志滿臺

金水作

國直画

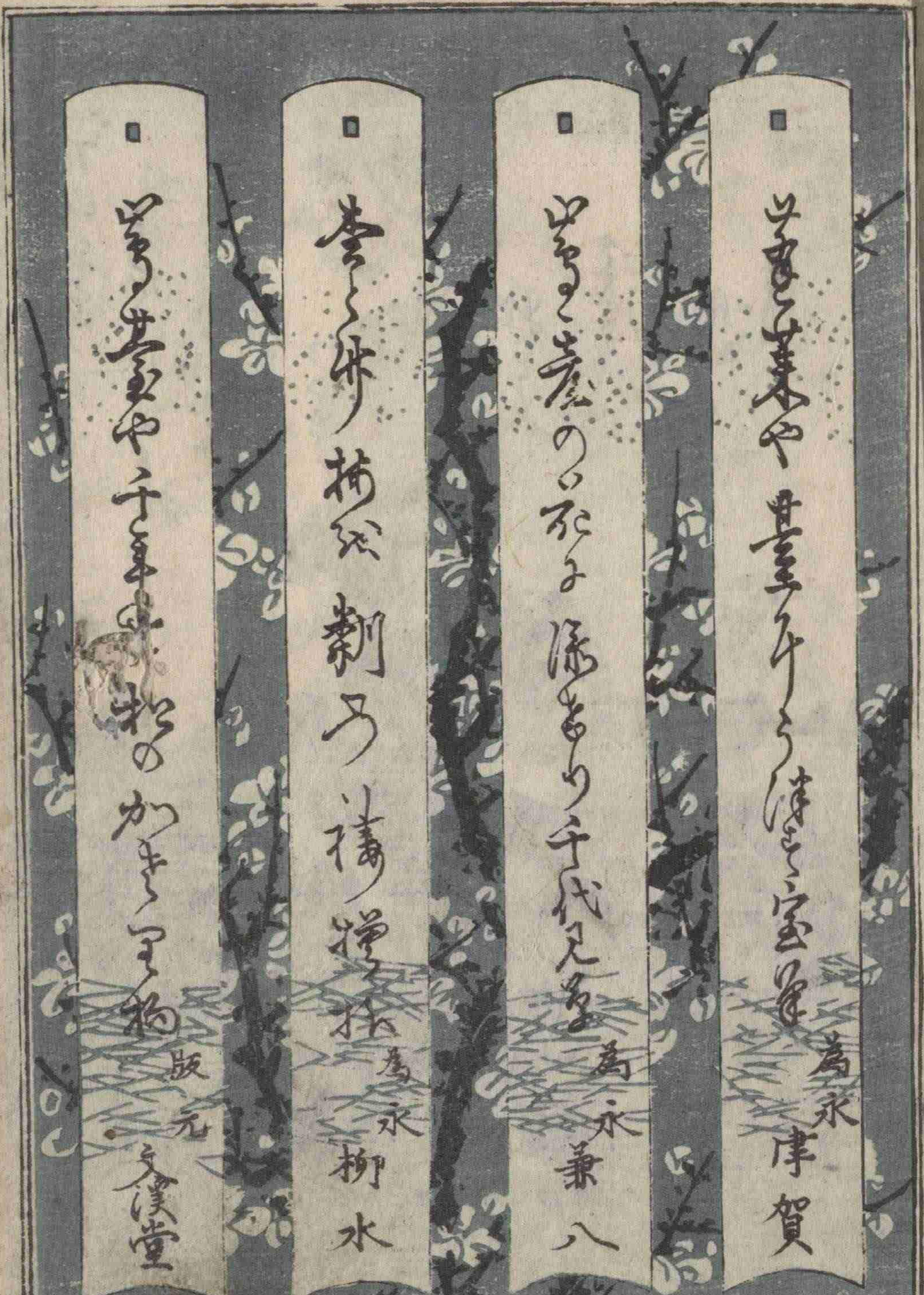
蓬萊や松に並ぶ松とし[illegible]
桃花庵
孝堂

蓬萊や松に黄金の花乃さく
衆庵
玉堂

亀臺を作る上手や春の振
苔竹
鶴女

蓬萊や去年[illegible]筆は始
鈴木
富女

浮世ゑも松の晨きこう筆の花
為永延蔦
筆葉や仙女を見ゆ新筆の山
為永春水
ちとせの緑り戌暑き春の作とえ
古為永春蝶
浮世墨乃要や去乃操かよきぎ
為永玉ん馬


若菜や豊年ちらす[illegible]宝船
爲永律賀
若菜の[illegible]千代見草
爲永兼八
[illegible]梅[illegible]割る[illegible]
爲永柳水
若菜や千年[illegible]松のかさ[illegible]
版元
文溪堂

柳川岩の
唄女 小春

鎌倉天間町
紙屋治兵衛

露を含む
旦の花も
霞を帯し夕の月も
青黛紅顔の
美人に如ぞ
枝ぼしの
於多喜

髪結乃於吉

花は春よ咲人もありけりし
芳野の山
うねやまごうろく
畝山強六

比翼連理花廼志満臺第三編巻之上

東都　松亭金水編次

第十三回

五尺の菖蒲に水を沃ぐと。美人を賛する唐人の。言葉にあくまでかのひやる。素顔ハいと美しき。浴衣抱て吾家の門卸せて提を明ながら隣を覗き「お君さんおりぶさう誰も来ハましないんだらうへ　ヲヤ小春さん結りつた先刻旦那が御出だらうへ今湯にお出でだと言ふ子。これ程ならいまと後に

来やうとさんくお帰りだヨ　小きち〽キヤ旦那さんへお宮河でへいり。
今日ハ多く影するのもあさましけれ。大きに今は来ハし
まいと品川で湯へ往て。その跡へ来たのが桜へどうせう
のふ〽十三後に来るとおいらハ子。ほんまごろうおまへ側の目利が
おいらをさる通りゆく。女房でもおいそれとお世話ひとつ。旦那
すまいが当時は宅をたまいらう笹に〽是も旦那ごけれど
何も大造な用いはし。言がお殿様贄でかるなるぞうろう子
あんが自宅の金がいらぬなかろうとおきて今あそ爲まり眞利が

悪いと知りつゝ。何の不自由して若まれのサ「へおまへハホヽ二
年の往ぬ人よ似合ぬぞ其くせダヨ。意根一つが心を直さりやア
一生悪いるのハ直らないのサ「アヽ恐れさんお様で人に嬲らう
せるよ。ナニ意根じやア直らないのサ。おまへも知つての通り私が身の上
みてくれるのハも。修行会ふ人ましてろう子「意根ヨ大字
ことおやア直らないのサ。悪じこそ処を善げる様な者ハ今時も多く
るハヨ。ワレ様子の根るさんぞ致し候ハ。自己が勤め致して居る
の紙。人に救ひ出されて。其まゝ渡して天の悪の主のきれまで

世話がなくて花で茶屋が悪くすると。サア好な男を引ずり込
で。寝酒の代さへ出ず日酒代たらず。飲で行の呑気さまの
とるすがはまだ浮気が花をまぎらはす。花の紀州で精よりふが
三味線で客を花でも素人が世話ごろうごヨ。其れは其地さへ
女房に男のあるのは知らぬ顔で何でもかまはずとその娘の勘定
次第にあつく花るから。可愛がられるか小言をいふ
も私ばかり見る事なり。おんな浮気するやうになる
客を突くるには花を悦ばせでヨ。其がうその地が

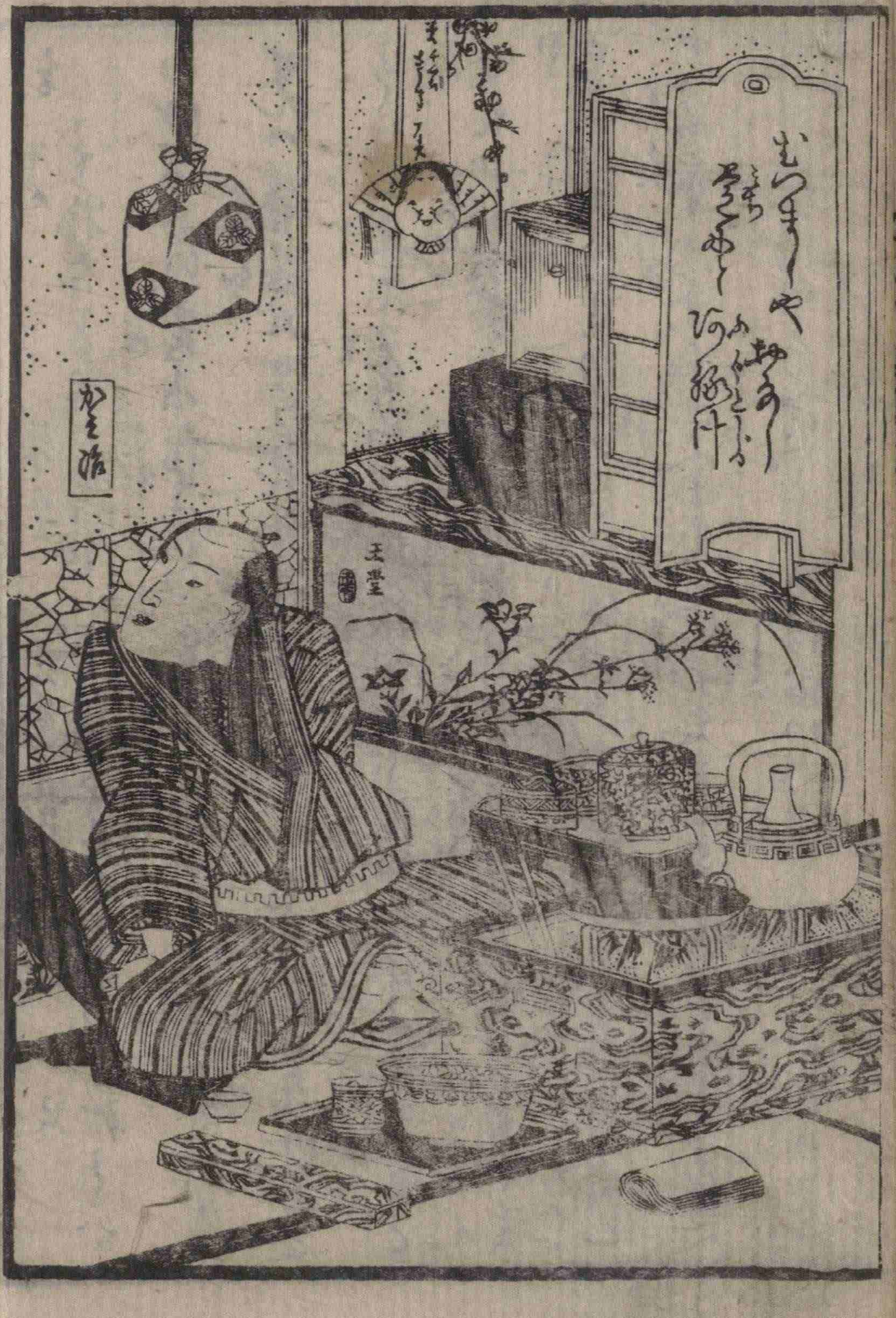
の稽古屋母ごと悪く言ましたサ。と上手な仕事をしたがる陰
方が宜い稽古本を出さん「もつと上手が宜のサ。お粧して世人が見る
者ちがひ、稽古のサ、ト/\「おやまア、藤やさんが来てもう、お昼から
そうしてごたごたお宅でも沸させう、ト内に居て化粧さへ手際よく
箱にとりつけし仙女香。美艶の色を出す紙、稽古あげても大評の側で
すへ。義理でも大分精出しますと存る節へ、入門所へ入来る
「ヘイそれ化粧が出来ますナ。先刻も来て湯へ往てと
ぶら/\。ぶら/\、文溪堂へ探しに往なさい。今日見る花かつみの二編

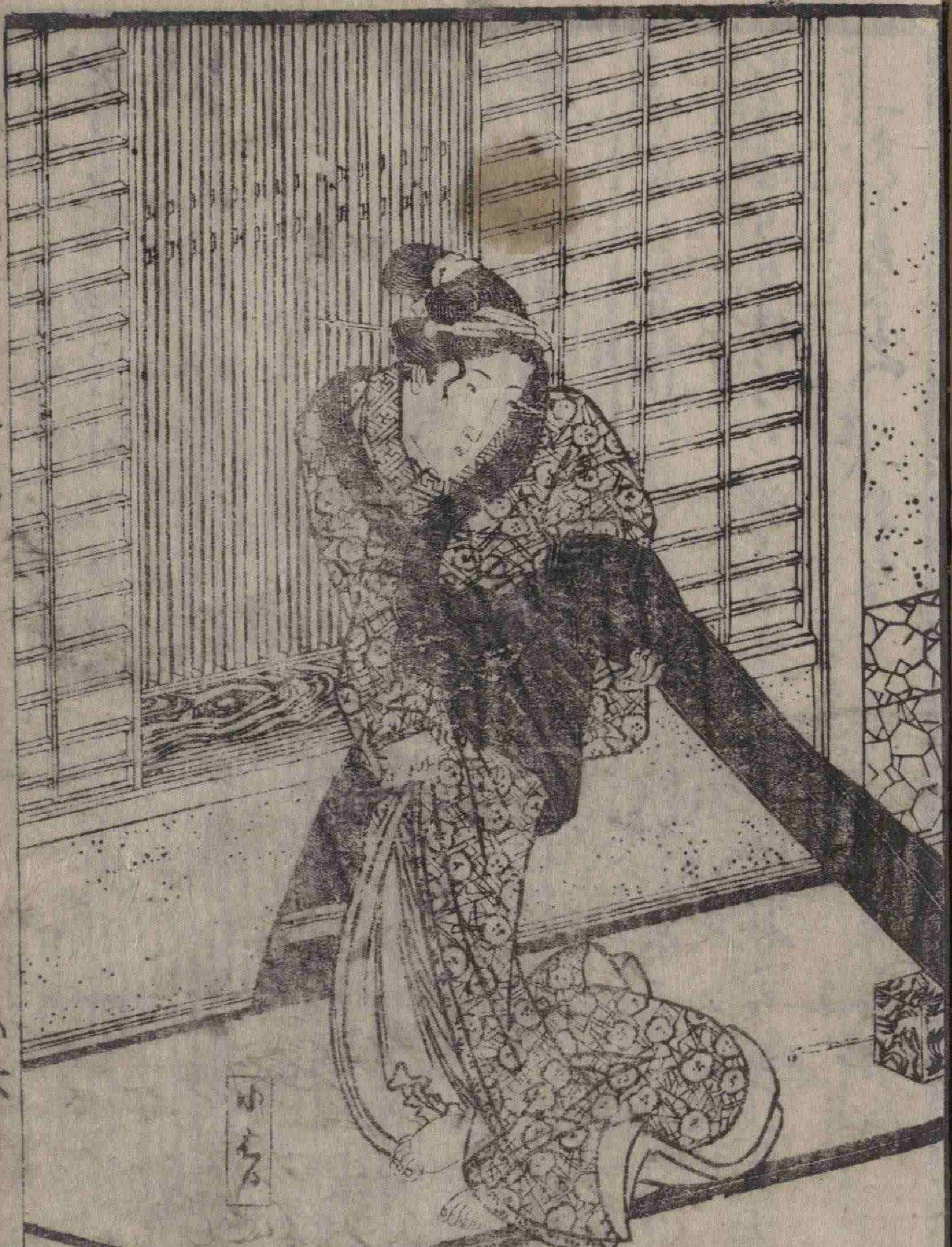
の浮世しごとに言ふ事ハ稲妻のごとくお見へ。此頃中らいり
後編がそろ〳〵と出て居ますう實を来るがコレ又結へ後編の
宅だやア。例も本の製作ハ紙ノウ。芝ハ萬象と松亭とか合
作だッさ。今度ハ松亭一人で書さッサ「ヲヤ漾しい殺く
松亭ヤア。今の流行人情本より。新の本がずつも面白くッて
なりませんヨ。ホン二まア奇麗なもんだ建ハ隠程出ませうろ子
「ヘ新撰ずらう言イのス。ほうし本なぞといふものハ武士でも
女のめサ。一度實て見ると。孫子ハ曾孫の代まであらアハヽヽ

喜「読本ハ何でも二編三編とあるものハどうやら面白くござりま
せんね。初編ばかりだよ。まづ実の像が書てあるから
活「左様サ。あのし今度ハ松亭一人で書といふこと。為
永の松あやういくらへヨ。まつたく独でかいたりといふ気へこそ其ゆへで
ヲウ筆ぶりハ何ぞ其工ものでもあるらう　喜「才子今日ハ不譲ぐ
そふで。そうも例の気の高屋も来ませんヨ　活「そんなら新作ハなんぞ
思付けの　喜「彼処の板も勝まり味よくありませんね。これハ
ようござんす。鶏卵のもらつてくるのが沢山ありますがほかく。玉子焼

でもおつらくさ（？）お茶漬(ちやづけ)の飯おあがんなさいナ。おまへさんのお好(すき)なの物ござりやう
治「好(すき)も好(すき)ずき、こゝ禅(ぜん)宗の坊主の飯喰ながら。元(もと)の始末(しまつ)に
あまつらア　香「ほんに人(ひと)の好(この)むは銘々(めい〳〵)ぢやヨ。そのこゝなアが枝橋(えだばし)の方(ほう)へ
お出(で)なさると、能(よう)くござりますがト　来(き)かゝつたところへ見(み)ごろ
ふ新(しん)造をたちおくれ、物(もの)がすく。紙(かみ)屑(くず)は捨(すて)るが(?)……する(?)
ひ　治「あゝじやア始末(しまつ)は出来(でき)ぬナ　香「そこで始末(しまつ)をするとつの
よい人(ひと)があります(?)ぶりも　治「耳(みゝ)よくこそ能(よ)くするをいへヨ
はつりくは(?)ぶらぶり　枝橋(えだばし)へは目(め)が向(む)く鍵(かぎ)へやりやア　其(そ)の……限(かぎ)りさ

女「二挺立のよい娘と。御婦人様と。連添今日までの憂きに浮身をつく
あげるゆゑ。実の親兄弟も有やア有り。二挺立よりは二挺立のよいを
せんに傾城買を起したのは。情が深いゆゑでございますけれど
よく考へてごらんなさりやア。傾城買ほど悪い事はありません。たつた一人と
云て心底から惚るゆゑ。此方に其程の働きも有て男と自
身も仕方がとりものにならぬのは。無理じやアありませんか。男は自
の器量次第で。二人でも三人でも女をおもちなされ楽なもの
いませんでアノ。高が知れたものでございます。どうも仕方はありませんす。それでござい


むつましや
玉堂



おまへさんが縦令情人が十人ありうとも女房にしやうとも。私は是けしはしやせぬ。悔しいとも思ひはしません。それでどうぞ後に添られまするやうにさへしてくださりませ。そうすればそれが本望でござりまするよ
治「なるほどおまへの様に思ひ出してくりやア。実に女の真実の心ござる言なら捨ぬ世間に何も恥かしいことはあるめへが
サテどうも喜様は帰られるへうもいかれねへ。何分もこうぞ
出来なさるが。傍の者のといふものを見へるへ置んさんに
喜「ほんとうに実の事をいふ。治「喜やう事の事へ 治「イヤヽ

コレサく。其息が活てゐる故をませぬ。ヱ手精が勝ば
のう。智恵でも方しだいで命にかへても。可愛いと思ふくかるもの
「可愛さ余つて憎さが百倍とやら。悪くいふを志めぬ
殺しもしかねぬ　是「イヤ大きにそれぢや。お主が悪め殺される
ことも悟りが格へつが。おめへが解死人を出すのがかはいそうぢや
其すさまじき程なる人迷ひの甘いはわたしぢやヨ。勝れてもおかまひなんは
斉中へ大逆無道なおまへござる。さぞ嬉しくてならぬ事へ是へ
まさるのサ。然し今く是へ気があるものか。手ウ実に高うさるおめへも

すえるが能。春「アヽきゝんすせうヨ。何ぞ悪いと思ふう
治「ドレ今お身がすえてやらう。春「アレマアお待なさいヨ。そんなら
火の付くやうに 治「いゞハ熱い 火の付くるけサ。そして熱く
いやらしい気がおこりやアしやせんへ。ア帯解きなせへな。エヽ埒の明かぬ
孩人擽ぐつてウ 春「アレ今解ますよ。まア お服がむすまつて
うゝ 治「これ程ほそい気の毒な奴があるものか。サア帯を解ねへな
いやらしいお治兵衛ハ お春が帯。くるくると引ほどき。下がへも
ほどかせて。ぐつと着物うしろへぬかせる 春「まア可笑な形でねへ

新りの極人が来て。何より気の毒しるしは一つの張見へ何
の邑まゝが女房の看病するそ中るのは。誰が何といふても
あのうトいふは心安い所のうち。女房といふ一ツが骨肩に志
みくうまとしさの。芸元ぶ是あれは手の陽精雲と女あ
ん雨とやならん。是より蘇精は作老も恙ず。漸く右そ
鉄膓ハさちあがり活へ夫婦かけ向ひハ気楽なものぞら
陰陽のが陰陽つが順信多諸胃ぐ。ドレ湯へ漬て末足ら言へ
ま浅て御出なさへ。亭内の草いものは扱らく塩する早日

治「ト。いつぞや此所が玉子の厚焼ぐらゐの酒落でござらう。おれが
之「捨りは何ぞつえて来るから。貴ゐ絵でもとつくりと重ね
アゝさく玉帯のちやくらるせんべいビト云ふ十文の小露をおきさ
手拭さげて出かけ。小遣は帯紙まであとしまく。煙の
炭を積みおろし鍬を「子も炭を川てへ炭ごのう
蝶手拭てあくと。幸にうち消がするからいけぬいのう。今え
夜ホン二佐倉を衣服ちらく中らう。急ぐ鰐ふ。よく絶川を
紙らうトいのみがら講へ罷きさ 与「老母さん。ぎうぞ消炭が

わるさの豊年ナ。終に火が消て困るぞ 〽アイ〳〵
らもあるぞ沢山な拾をきへました。此本の火が消えた折れ
あすッこんぶん。雄牛のろうけが強いから火が消ましたらう
手水〳〵 〽アレサ 左様じやアありませんが。誠に気が消がしく
困りきるヨ。どりやアまづ下拾ろう。やがて火を吹おこし火
よりも挑灯狗のうち。嫁子てや兄弟の我々もあきれ
くなる。夜なたとへし女の念力。ぞうしく寛えんと狂気の
おそろしく。此方彼方をうろつきかへりく。やがて不意が門の口に立よりて

咽きゑと肉の容子ゆへ浮ところ。知らぬ程小ところハいそくと
黄花の寄て揃立ゑ。猪て人はる其の影をとちやと見
流より引あけ障子の影を見かくまで。年ハ十九ちか
たかり。標致もくまて一のまのでも。身形も衣風な大竈
ぐう中ゝ新川さ影を見て。気を働ても浮がハへへ手や
おきくきん八何方かゝ数がきハヽ廿く何方か来
も能人の月ぞ。小ちきんとかけなきん方。私か肖質紙
湯きんと。流ゝ出てき来ふで。おきハ揚く夜一夜

往んで枝鴫のお滝とかいふのかヨ。おめへまで淫業人も
似合ねへ。おかの紙まで手すきてさのえへ。まあ今ぢやア維且取
が付く。自侭ぢやアねへが、いつくおそろしさぐさくゝ。おかみさんがア
入めへのみ忠穂の女の解。上手媽も臍がね先へく
若や切かる言葉の奴。かまへ笑ふく動かし逆とせずが。元の
きうきうまれつき怜悧生質。人と争ふ奴柔かく具ず。忽地兵気流
皇へキヤア、アたましていでいまして新へぞうぞの。おのれ
中まいさ。何事か儀きさんのまいーヨ。おヤア まヤ進方へお上人うまへ

ました。増戸途中へおもむきぐぜいまくらうポン二よく尋
ねて下さいましとわへ下柳かげかゝらまく。おし沢へお
沢倉の様子ごとくおはあるく。やがて店のまへ見世

第十四回

當下小きんは茶やに見とく一戸おん茶見せ一ツおとひとへ
其その丈郎の積へおおさまし下ひへがおおつ沢へ言ふ
なく。ぼうさまきつゝしくつちまいして一十五ぬけ
きんちゃ。実を世おまへ宗らうがおもしくまきすしが

く知れなくいそ。何様の園屋でもござりやう　喜「ホンニ
左様でござりましやう。又ずくもよく知れましたる子　花「アイサ
知れましたも色で無ぞ思案して悟れば。お人方のえらうじやア
饒倖でござりやうが。此方も大きな女の一義でござりやう。若紙合ても
うづく様る気で。類て実当このサト目ま角立てるお滝が
形相とるあるも自然に一物ハ。お主どの数突をそ来てね家
法くぐると大滝さんく　喜「お前さんハ何ぞお様の立身を
でもありませの知れませんが。先刻から知つてなるのでござり

難儀のが。どうも心持ハわかりませんから。何様しさまけで
ございますまいか（十二　心ざッても新造ちやァ可笑がの。一寸御聟
茶ぶくもあがりなんし。親も肯も立ちやァしめへがマァよく親
つくおさえ私が紙治さんと添まして。そのとおまへ一所で
そまへうし何様離しうの何と云ふんでェ。親へがアノ人
のお蔭で。却して楽に暮して居るもんでェ。去年
の経緯へ来しちやァ親の御きざ。大ろさ私きやァ親の女人
くると世川で奥へあの人夢中する様子隠して居なさる

けしきでも。そりやアおめへ親類がかり若者で。色男の氣
きづかひ。何程みつちでもするがよし。お前も隨分世話
み。あきらめも親けまでも。何も私にお話隠するには
およばぬはいやアないか。何でも夢中朋にいさうではし
し親まきつこと後隠するとおりよと。後のためのごヨ。それに紙治さんも此頃は[illegible]の方へいきられるが
若さん様へかう。急く用があるとも[illegible]
あらぬで國るから今日は[illegible]く[illegible]

まして。何でも地方は疎るさゝかや遠人旅人何事生
しそかもまるトいふまでに直がるハやうぞうで知ら
まさこる。のあつを隠しずてして聞や番生とハ志る其今
あへ紙治が噂らバその時ハ難面貝也裏るハんのもわが
影そらう。とハいふもの、地気が大事。お前の容子ハ女房
気とろ。先頃涙をのこす時から。情人に我のさこ恋ふのも無
理ハあげまじ地方まハ。その勢てより去かハし爺さんが世界
遠とてしも。我に要え辞されて。無引手まで贈りさ事をだし

の物の妄念で囲女よ幻妻池の男を寝られる揺毎ものと
彼も多く天下らまで八萬々劫の罪の。お爺父さんへも涙ねりけ来。それ
より今月八何処までも。気くねと棲を儀しし。左程して跡
た紙落さんと。お詫しくて筋の昨らにさら仕方もなさ
と思ひかくして荒気と思ひ。まへまくマア。そこまで光刻ろ可
し翁みとをお恭寄るンござ子。そりやア勿論何の好うしそ
をおふしハ御疾雲へも常で下さるの。我も又浮世業らの
お実会をして孫るうち。お頼み申して下さるお方のお蔭で

自体に於ても道楽くハ。お前さんが道楽しなさって。暴ねく
ござる日もありますが。いやらしいのハ俳諧師。終に一回
冗談ぐくも。あさましハありません。唄女ハ妓女もおかしいこと
色多い表の渡業ぐらゐ。大ぞらなか性ハのんびらうとお思ひ
あさうら知らるいが。不粋なかゐ取おいちやア手稼なもの
おやア ござへませんト云捨ましく お庵ハ急ぐち。時なる
誠どもく文字多分。彰にちらして膝ある。三味線さん
〆十程なる奇麗なる頃ハ利で あへっ おまへ手ぬ楽の前に

唐人このもの人の容儀。左様して胡弓ひきつけて楽しんで
暮らしける。誰もかれもいろいろあるもあり。昨日は何様で今日は
遠く親しく遠く親しく彼の寄る人もありけん。今絶の男を
誰もそこへ引き込んで。知らぬ顔もよく無体して。信実らしく見えて
あるげる。後にし心も知りましく。三年にて猿も芸で
心をしてかゞまりても様態して見えるもの川もくまりと秋の
方へ渡り給ひても置かれけれどありけりけん。あまりは何
あまりしらずかが。見頂紙にしんが指揮で親の子お尻

嫌ふのでもきまる処へ参りけ。勝手より来る続く女ごらうの
中へ這入て引うけて世わく旅籠世話せるのが縁と数く
表向まづ見入べしあいけまで二女房の情知く、あるふと去ろ
約束の銭あるうへ。器量は縁張さんの女房ごとかけ人
の万へ仕機するがあて西ス了あくあいが。器量の方が先
ござ左様若門く衆へさるが続て去る。あぶる一通り心
易くきまのおかりて世とも情合があいとのふ人子が此様子
よし銭あるもあい。けまでど。世間の人の評判す人おかし

世話をしておくとのことでござります。金の為とやらに取つて置

のだヨ。亭主の義理でおいでだけれど、其れと云ふ紙小遣ハ

人さん「マアく お嬢さん お待ちなさい。私の方でも当分

いふのがあたりまへだヨ 実「何だか早くお出でなされ。紙治さんと

情合があけりやア。なんにも云ふことはありやアしない

まだそれで私の方でも。物紙細密ハいふのではないのだアね 吉「アイサ

情合があるとハ云ふけれど、ただ今出てまつて見れば、どうも

云ふのではありません。実ハ私は紙治さんとハ二世

わけさ夫婦ぶりでハありますが。小ゑんさんと云ふて
時分ゟ。不思議なことで別れ別れで。親のお爺さんも承
知のうへ。始終ハ夫婦とやくそくの。間もなく隔ることが
出来て。それまでハなか〳〵居るが。尽せぬ縁の比翼の座し
きで逢ふも。お主人の手前遠慮ゆへ。表向でハたがひに知らぬ顔に
後ハ幸ひ下へ渡され。流るおもひの嬉しの最中。産でお
まへが立帰で。とこのも私ハ知つて居ません。悟れハ女の密通
ござる。夫側女ハ幾個あるとも。それハ堂とも厳ひませんが

紙治さんの実正の。女房といふものハ私ぢやヨト云ますれど
お前ハ御亭主ヤこの嫁ハ年程も似合ぬ。よくべちやべちや
くちやとおしやべりなされん。情合ハまいといふ口の下からの実
正の女房ぢやと。何ぢやぢやぢや分らぬへ。何でも私が今
いふ通り。堅い約束がしてあるから。いづれ紙治さんに
逢ふがよいぞ。お前さんの姉様ハ病気で。物をいふハ嫁子聞ぬへ
ハイ大きに御やかましうごいましたトいひ捨て出ておさんが嫁よれが
お前さんが読ますく。小春ハそう処へ手紙をつけ川と注入る

その折から。ちよつくり這入て紙屋治兵衛。小春が背中
を撫ながら　治「コウおまへ未練恋し二人ヨ。どんな奴が来てもやるなよ
てぢやおめへ国川さらう。そこでも湯から川へ
笑べいとゆふおかはの聲。こりアどうもやかましい隣
つらのおやまさんの顔にかゝります。彼奴が云ふさ八
笑こヨ。あるわどそふでアろ蝋燭で。喧嘩銭ほうけりまして
きこ見。口を利てうまえ遠ひなし。そのあつさて晴人
あまつさへ遠人の又。勿体その頃八おかあへの使方を借の

と亭主が時〴〵ぐず〳〵ぐず〳〵と諍合で。女房に法論をしと
云ふこともわるくちらうが。よくそりやア何の通りのあだなれ者
かめ人あこんぞとアうまいが遠ハア。左様云ちやア可笑しいが。
自己も今じやア業さうふん人の。十把一人も浮みに兄ぶぐずらして
あんまり世間嫌にさせるものか。だん〳〵言葉が錆びてごんが
がへりなふ〳〵と云ても。女房に苦労をさせるおやあ極へ〳〵。ヘ悋気
ことをと気めへさせるト常の男紙ぬ言ぬが。
紀あがり表隣の亭主女房でおや安く〳〵。そさる和置てくれるが子

何のかのと面倒ぢやう。情合ハないわけハないと云て返しん
し仕まふのと御河ぐずさ。親ハ浪花さんの御妻ぢやう。在所
おめへといふ生しちやア。どうも私も食云てハ居らなあいかう
強がッてのひけ炭云て。私の方とても女房ぢやと云さうな事
後生で。やさ風呂で拙者いふの。ヤレ風ちやくちやとしやべる
のと。いふくらゐなら云て。忠ふ通川く仕まひませうが。私のきがやア
モウく。悔しくはてありませんト まさ活抗と泣倒せバ。側の紙
治ハ穏ゞ果なからくハ物もいはず。茶を飲で居たりしが

世中くに狗おちぶれけり作へ気まゝな御用手紙本に云ふ事へ八ナ

自己が新のみして大丈夫だと思ひ甚へナ。最己下番自

れ己が了吉事哉おもむき侍るあ。おふくろさま何とやらがおもしろく入けれ

ど。おれがう驚き流石あしてそ立振へり今へ何様いふ事ぞと思ふ

其の身。お女房さんの乃驚さゝるゝ所をうかゞひ。扨何ぶん気も成れし

おやじさんと女房ふするうち。新古のかゝ長旅とひの事

作へ見ずきさ手紙を先繋にいふ事あれじゃまぬか人にゆ舎ヨ

おかく国の奈おまへの女房ぞ遠く振へ升。所でお為ゆがうけ振候

よく言ると。嫉妬どうしていろいろと六十番。是も自己が身の恥辱さ
所為といいのあり。些の事でも一家人の為の八害になり切て恥さ
時のまのうらみさんざう自己が愚ハおかしても孫へまで及ぼさ
が飲食好よくは。お徳も香近せずく家内を始終身の上もその人
でお知れ共。何程お恵みて許へ継続く事ろとも孫々迄
仕もうが。本様とも成て彼風るく。彼方も此方も納る理屈ざ
またお知れ共是限りに実。離それていふ思が。ヨイ其を始く
いろ推ざ。其上に弊もわし兄人にまで報がかゝる。猶子勝さすりやア

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花の志満臺三編　巻之上　終